

現場においても、その実践化が着々と示されている。しかし、指導の場が、保育者・幼児という人間関係において行なわれるかぎり、いかに誘導がたくみであっても、保育者というおとなの、幼児に及ぼす社会心理的圧力は見逃がすわけにはいかない。そこで、作業を中断することが、幼児に対してどのような反応を及ぼすかを、実験的に検討しようとした。これは、基本的には、目的遂行への意図があるかぎり、その当面の着手された作業が中断されても、再びその中断された作業に復帰して再行する傾向があるという仮説に基き、その再行に対する保育者の存在の効果を明らかにしようとしたものすぎない。

方法 実験事態を、再行の際に保育者が傍にいるというA事態と、幼児を独り残しておくというB事態との二種にして、successの程度に分けた。中断される原作業は積木を主として用い、実験(1)では、積木をやらせ、これを中断して玉通しをやらせ、これを終了した後原作業に復帰する割合を、A・B両事態で比較した。この結果ではA事態がB事態よりも少なく、保育者が傍におれば、中断された作業を再びやろうとするよりも、保育者の次の指示を待つものが

多かった。実験(2)で作業を変えても同様なことが起った。実験(3)では、中断させる仕方によって再行反応がどう変化するかを見たが、五種の条件下、ともにA事態での再行は少なく、特に保育者の禁止力が強く再行を抑制していた。実験(4)では、作業への要求水準の上昇を保育者の圧力が抑圧すると仮定して、これをA・B両事態で比較したが、やはり保育者の傍にいる事態では、上昇率が、保育者のいない事態よりも少なかった。このような保育者の及ぼす圧力に対して過敏に反応するかどうかは、幼児自身の人格条件にもよると思われたので、これを精薄幼児について試みた。結果は、自己の能力を保育者から評価されるという感受性が強いものほど、中断された作業に復帰して再行することが少ないようであった。

(大会発表論文抄録67-68頁)

IV 運動・健康管理・食物教育に関する研究

三才児の運動あそびの

発達に対する一考察

東京都保育研究会共同研究グループ

秋田 美子・浅野 信子

佐藤 玉枝

三才児に与える運動遊びの基礎的な資料として先ず三才児が自由に、自発的に喜んで行なっている運動あそびを忠実に記録してみる。ことから出発して、その運動あそびの中で体のどんな部分を使っているか、またその興味の中心点がどこにあるか、さらにそれらのあそびは遊具とどのような関係をもつかということを分析してみた。

目的 三才児の運動発達を促進させる、遊具の整備と、適切な運動あそびを与えるためのよりどころをえたいということにあった。

結果の整理 (1)遊具を使ったあそび、例えば、砂場、ジャングル等、(2)道具なしであそんでいるもの、例えば、やたらに走り廻ったり、両足とびをしているようなもの、(3)遊具でない道具を使ってあそんでいる。地面にレール、河、鉄橋などを描いて汽車ゴッコをしたり、ふとんを敷くでんぐり返しをするなど、の三つに分類してみると、60%がやはり遊具を使っていることがはっきりした。

体どの部分を使っているか 体全体を使って遊んでいるものが94%もあり、極く一部しか使っていないと思われるものは僅かに6%で、三才児の運動あそびが全身運動を中心に行っていることも確かになった。更に位置の移動ということから観察してみると、あそびの中で78%も位置の移動を楽しんでいることがわかり、三才児の少しもじっとしていない生態も明らかになった。

興味を中心 動くことが多いが、この調査が十月のためか、技術を伴う運動遊びが49%もあった。(大会発表論文抄録35頁参照)このことを四月の入園期と対照してみる時、ただむやみに走り廻ることから、次第に高い技術を伴うものに向って発達していく過程がある程度把握めるのではないかと考えられる。

また遊びの内容から質的に分類してみると、その中でも目的をはっきりもって遊んでいるものと、そうでないものとのわけ、更にその目的が遊具・道具を使って構造的な遊びに発展していくものとそれ自体を楽しんでいるものとに分析してみいくと、三才児の遊びはまだ遊具そのものを使って楽しむ段階であることが解る。しかし構成されたあそびが25%もみられることは次第に未分化のものが漸次、分化し、更に興味を中心も技術的な、構造的なものに向っていくことが察知出来る。

この考察の結果から私達は、現在、三才児の保育計画の中で与え

ていた運動遊びの検討や、適当な遊具の整備計画、更には、指導の方法としても興味を中心とした融通のあるあそびせかたの研究をするための基礎的な資料として、或る程度役立てることが出来ると考えている。しかしこれはあくまでも中間報告であって三才前期の調査を行なうことにより、研究目的を更にあきらかにすることが出来るものであるというまでもない。(大会発表論文抄録34―38頁)

園児の睡眠に関する研究(第3報)

長野県保育専門学院 小松 卓 郎

中川 ち え

園児の睡眠、殊に午睡をどのように理解し、どのように取扱うべきか——という問題は、極めて重要な問題でありながら、常識的なあまりに却って思いがけない過誤も招かれやすい状態があった。例えば、夏季の気象条件が全く異なる東京での「必要午睡時間」が、そのまま長野に当てはめられる、というような「標準化」から午睡状態の悪い子が、直ちに保育技術や愛情の場で論議されたり、問題児とされたりするような事実が、かつてなかったといえるのだろうか? われわれはこの角度から標準必要睡眠時間に対する家庭での、また園での時間的關係を調査して、午睡の必要時間に地域性のある事を明らかにし、また午睡への馴化、ねつきの「よし」わるし、季節性等に体質学的な差異のある事を第2報までに報告したが、今回は受持保母及び母親等が「おやすみなさい」をいってから園児の実際になつてくまでの時間を観察記録し、これを中心に三十四年の七月か